

2020年3月12日

第12回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 日本のスポーツを支える「縁の下の力持ち」を表彰 受賞者決定のお知らせ

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)は、2019年度「第12回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」(後援:公益財団法人日本スポーツ協会、公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会)の受賞者を決定しました。

本賞はスポーツ振興に多大な実績を残すとともに、社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰するもので、「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てているのが特徴です。

受賞者の詳細は、以下のとおりです。

第12回受賞者のご紹介(敬称略)

[奨励賞] Scrum Unison (スクラムユニゾン)

ラグビーワールドカップ日本大会にて世界から集まる選手やファンを
「国歌やラグビーアンセム」を歌って“おもてなし”



◆プロジェクトメンバー

ひろせ としあき
廣瀬 俊朗(スクラムユニゾン代表・元ラグビー日本代表キャプテン)

むらた たくみ
村田 匠(音楽家・カルナバケーション)

たなか みり
田中 美里(シンガー)

よしたに ごろう
吉谷 吾郎(コピーライター)

きつた ともお
橘田 智緒(映像ディレクター)

まるおか ちえ
丸岡 知恵(映像アシスタント)

きたがわ まいこ
北川 茉以子(事務局)

※この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。(担当:大庭)

www.ymfs.jp

公益財団法人 ヤマハ発動機スポーツ振興財団 (YMFS)

〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500
TEL: 0538-32-9827 FAX: 0538-32-1112

Yamaha Motor Foundation for Sports (YMFS)

2500 Shingai, Iwata, Shizuoka, 438-8501 Japan
Tel: +81 538 32 9827 Fax: +81 538 32 1112

ラグビーワールドカップ日本大会にて世界から集まる選手やファンを「国歌やラグビーアンセム」を歌って“おもてなし”

スクラムユニゾン
Scrum Unison

ラグビーワールドカップ 2019 出場チームの「国歌／ラグビーアンセム（応援歌）」を歌って選手やファンをおもてなししようという取り組み。「10 カ国語。話せなくても、歌うことはできる。」のキャッチコピーの下、多くの人が歌いやすいよう、歌詞に読み方を振り、日本語訳もつけたレクチャー動画を作成。さらにキャンプ地やスタジアムなどにて実際に歌い方を指南し、観客と肩を組んで共に歌い、活動の輪を広げた。

| チャレンジの足跡 | 「アジア初のラグビーワールドカップ。何か今までにないことを仕掛けたい！」と悶々としていたと言うのは、元ラグビー日本代表キャプテンでラグビーワールドカップ 2019 アンバサダーを務めたスクラムユニゾン代表の廣瀬俊朗さん。「ある朝突然、“そうだ！みんなで国歌を歌ってはどうかろう”と思い立ったんです。日本代表の主将時代、チームの一体感醸成のため、みんなで君が代を練習し試合前に歌って奮い立ったこと、また海外のスタジアムでは観客が代表チームと一緒にアンセムを大合唱していたことなど、実体験がベースにあった」と振り返る。

早速、廣瀬さんは知り合いで音楽エンターテインメント集団「カルナバケーション」のボーカルを務める村田匠さんと J SPORTS ラグビー中継のエンディング曲を歌う歌手の田中美里さんに声をかけた。村田さんは、廣瀬さんの慶應義塾大学ラグビー部後輩のお兄さん、田中さんは、お父さんが同じくラグビー部の先輩だった。さらに「4年に一度じゃない。一生に一度だ。」のラグビーワールドカップ公式キャッチコピーを生んだ、元早稲田大学ラグビー部のコピーライター吉谷吾郎さんが合流した。「ラグビーの価値観を分かりあえる仲間と組みたかった」との言葉通り、廣瀬さんの情熱に共鳴するラグビーつながりのメンバーが集まった。

そこに田中さんの紹介で橋田智緒さんと丸岡知恵さんの映像チームが、さらにプロモーションやマネジメント業に長けた北川菜以子さんが加わり、早速、活動の肝となる出場チームの国歌・アンセムを歌った動画作成に着手。歌詞は現地語表記に加え、読み方をカタカナで振り、さらに和訳も添えて覚えやすくした。「楽曲から翻訳作業に歌唱指導方法など、歌に関する全ては、匠さんに一任。匠さんつながりで、本当にたくさんの方にサポートい

ただいた」と廣瀬さん。さらに音楽家として村田さんのこだわりもあり、発音や表記の細かい違いはジャパンラグビートップリーグの外国人選手や監督に確認するほどの徹底ぶり。

2019年2月に始動し、5月のスクラムユニゾンお披露目会以降、日本ラグビーフットボール協会始め、キャンプ地やスタジアムのある自治体、小学校への働きかけなども奏功し、活動は驚異的なスピードで各地に広まった。キャンプ地の市民が練習に訪れたチームをアンセムで歓迎したり、マスコットキッズが試合前に選手たちと一緒に国歌斉唱したり。なかにはキャンプ地でもなく近くにスタジアムもないのにワールドカップを盛り上げたいと、介護施設などでパブリックビューイングしながらスクラムユニゾンの活動を行った有志の方も。歌でつながり一体感で包まれる各地の様子は、SNS 等で拡散され、世界中で大きな話題となった。

活動を振り返り廣瀬さんは「予想以上に大成功(笑)。ラグビーならではの競技性もありますが、まず仲間の6人がとにかくがんばった。大会期間中、匠さんや美里さんは時間を見つけては積極的にスタジアムに足を運び、会場周辺やスタンドでゲリラ的にスクラムユニゾンしてくれました。また僕らに賛同してくれた自治体や団体のみなさんが、現地で歌詞カードを配布するなど、ぐいぐい行動してくれたおかげです。そして何より子どもたちに広まったことが大きい。国歌を歌えば、その国の歴史や文化を知るきっかけになる、これから世界で羽ばたく子どもたちが国際交流できる機会になればとの想いが実りました。2023年フランス大会も視野に、東京2020では少なくとも7人制ラグビーと車いすラグビーの応援で、また来年の世界マスターズゲームズ2021関西でも、スクラムユニゾンをもっともっと広げていきますよ」と目を輝かせた。



Yuriko Kasai

■ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 概要

本賞は、スポーツ振興において多大なる実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物・団体を表彰し、受賞者のたゆまぬ努力と成果に敬意を表するものです。競技、指導、研究、普及、ジャーナリズムなどさまざまな分野において功績を挙げた「縁の下の力持ち」にスポットライトを当てるとともに、受賞者の実像を通してチャレンジすることの尊さや、「努力は報われる」という信念を社会に広げることをめざした表彰制度です。

	対象	選考のポイント	賞典
功労賞	長年にわたるスポーツ振興への貢献や、先駆者として実績を挙げた人・団体	長年もしくは過去に行われ、年数を経てから高い成果と認められた尊敬に値する礎的、先駆的な取り組みであること(指導者、研究者、審判、ジャーナリストなどによる、その競技やスポーツ全体の底上げに貢献した活動など)。	賞金 100 万円 (団体は 200 万円)
奨励賞	今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待される、その年、極めて高い成果を挙げた人・団体	短期的、もしくは中期的に行われ、その年に高い評価を受けた賞賛に値する取り組みであること。たとえば世界レベルの成果を発揮するにあたり、重要な役割を果たした指導者、研究者、サポートメンバー、審判、ジャーナリストによる活動など。	賞状・メダル 副賞

※2019 年度は奨励賞のみ

■選考委員会 (敬称略/五十音順/2020 年 1 月 1 日現在)

選考委員長	浅見 俊雄	東京大学 名誉教授、日本体育大学 名誉教授
選考委員	伊坂 忠夫	学校法人立命館 副総長、立命館大学 副学長
	衛藤 隆	東京大学 名誉教授、大阪教育大学 客員教授
	遠藤 保子	立命館大学 産業社会学部 特任教授 名誉教授
	景山 一郎	日本大学 生産工学部 教授
	川上 泰雄	早稲田大学 スポーツ科学学術院 教授
	北川 薫	梅村学園 学事顧問、中京大学 名誉教授
	草加 浩平	東京大学 大学院工学系研究科機械工学専攻 ディレクタ
	小島 智子	追手門学院大学 客員教授
	定本 朋子	日本女子体育大学 名誉教授 特任教授
	篠原 菊紀	公立諏訪東京理科大学 共通教育センター 教授
	杉本 龍勇	法政大学 経済学部 教授
	高橋 義雄	筑波大学 体育系 准教授
	野口 智博	日本大学 文理学部 教授
	福永 哲夫	東京大学 名誉教授、早稲田大学 名誉教授
	増田 和実	金沢大学 人間社会研究域人間科学系 教授
	丸山 弘道	株式会社オフィス丸山弘道 代表取締役
村田 亘	専修大学 ラグビー部監督	
ヨコ ゼッターランド	公益財団法人日本スポーツ協会 常務理事、元バレーボール選手	

※競技団体、大学、報道機関、ジャーナリストなどから候補者の推薦を募り、2 回の選考委員会を経て決定

■歴代受賞者（敬称略）

第1回 2008年度	功労賞	中野 政美（柔道指導者） 女子柔道の世界レベル選手の育成と女子柔道の発展
	奨励賞	丸山 弘道（車いすテニス指導者） 北京パラリンピック金メダルへのチャレンジ
第2回 2009年度	功労賞	塚越 克己（スポーツ医・科学研究者） 日本のスポーツ医・科学の発展を牽引した「縁の下の力持ち」
	奨励賞	増田 雄一（アスレティックトレーナー） トップレベルのサポート技術を一般レベルに拡大する取り組み
第3回 2010年度	功労賞	高田 静夫（サッカー審判員） 日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用
	奨励賞	中村 宏之（陸上指導者） 雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践 中北 浩仁（アイススレッジホッケー指導者） 強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ
第4回 2011年度	功労賞	岸本 健（スポーツ写真家） スポーツ写真家の草分けとして、スポーツ報道の機会拡大に貢献
	功労賞	水谷 章人（スポーツ写真家） 独創的な表現でスポーツの魅力を伝え、スポーツ写真家の育成・環境整備にも尽力
第5回 2012年度	功労賞	樋口 豊（フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者） 国際的な信頼と幅広いネットワークを活かし、日本フィギュアスケートの「開国」に貢献
	奨励賞	江黒 直樹（ゴールボール女子日本代表チーム ヘッドコーチ） 「楽しいリハビリスポーツ」の普及をめざした 日本女子ゴールボールチーム 金メダルへの挑戦
第6回 2013年度	功労賞	臼井 二美男（技師研究員、義肢装具士） スポーツ用義足の第一人者として「走る喜び」を提供する挑戦
	奨励賞	東京 2020 オリンピック・パラリンピック招致委員会 戦略広報部 戦略広報という立場から東京 2020 招致を支えたプロフェッショナル
第7回 2014年度	奨励賞	妻木 充法（医学療法士、鍼灸あん摩マッサージ指圧師、日本体育協会公認アスレティックトレーナーマスター） 公正なジャッジを支える「鍼治療」の技術 門田 正久（理学療法士、日本体育協会公認アスレティックトレーナー、日本障がい者スポーツ協会公認スポーツトレーナー、介護予防主任運動指導員） 障害者アスリートのメディカルサポート環境を拡充する取り組み
	功労賞	藤原 進一郎（日本障がい者体育・スポーツ研究会 元・理事長、日本障がい者スポーツ協会 元・理事、技術委員会 元・委員長、日本パラリンピック委員会 元・運営委員、極東・南太平洋身体障害者スポーツ連盟 スポーツ委員会 元・委員長） 「すべての障がい者の生活者にスポーツを——」その信念を貫いた 40 年
第8回 2015年度	功労賞	今村 大成（株式会社タマス 取締役/Tamasu Butterfly Europa GmbH 社長） 日本若手卓球選手の武者修行を支え続ける「デュッセルドルフの父」
	奨励賞	野口 智博（日本大学文理学部 教授/木村敬一選手パーソナルコーチ） 障害者スポーツ全体の課題に先鞭をつけた挑戦〜トップ選手の指導からパラアスリート強化の現場へ〜
第9回 2016年度	奨励賞	狩野 美雪（デフバレーボール日本代表女子チーム 監督） トップ選手の経験を活かした指導でデフバレーボール日本女子代表を金メダルに導く
第10回 2017年度	功労賞	荒井 秀樹（日本パラリンピックノルディックスキーチーム監督） パラノルディックスキー、ゼロからの挑戦
	奨励賞	日本スケート連盟 スピードスケート科学サポートチーム 平昌オリンピックのスピードスケートマスタートおよび チームパシュート競技へ向けたレース分析サポート